



最後の晩餐

「食に関するシンポジウム」で基調講演をした。討論の時に「先生は最後の晩餐に何を食べますか?」と、司会者に訊かれた。私は、死ぬ前には食欲がなくなることを知っているので、「何も食べることができないと思う」と言うと、司会者は困惑した表情になつた。

私は付け加えた。「最後の晩餐とは、キリストの処刑を前にした食事のことで、健康な食欲を持った人が人生で最もおいしかった料理を食べるということだと思います。そういうことなら私は親子丼を食べたい」。

今から7年ほど前に、私は国立大学病院の病院長をしていた。国立大学病院が独立法人

だちは、最後には病院長の私に向けられた。病院長に直接会つて不満をぶつけたい職員は多かつた。不満を抱えた家族や患者も院長に会いたがつた。私は病院の中を歩けば、地雷を踏むのではないかと思つた。

病院での問題は、それに応じた委員会ができており、その委員会で決まる仕組みになつていた。しかし委員会でも拒否され、事務からも相手にされなかつた案件を持つ者は、病院長に直訴しようとした。

昼間は怖い秘書がいて、病院長に会うことはできない。電話も秘書が受けるので院長が直接対応することはない。しかし5時を過ぎると事情は変わつた。院長の周辺には誰もいなくなつた。電話には院長が直接対応することになつた。

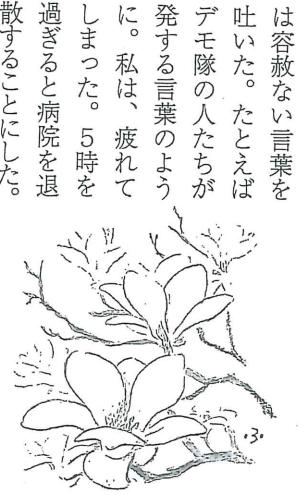
電話に出ると患者からの苦情ばかりである。職員の対応が悪い。清掃がなつていない。職員は、人を増やせ、場所を増やせと言つて院長室へ現れた。人は病院長という「役職」に

井 口 昭 久

化された時の初代の院長であった。独立法人化とは、経済のことなど考へたこともなかつた医学部の教授たちに、「これからはお金を稼ぎなさい」ということだつたので、うまくゆく筈がなかつた。

その頃は小泉改革で社会もいらだつていた。マスコミは医療事故を競つて記事にした。医療事故が起つると、私はテレビカメラに向かって深々とお辞儀を繰り返した。そのおかげで私が病院長であるということを知つた看護師が多かつた。

病院に勤務する医師も看護師も技師も、事務職員も気持ちがすさんでいた。彼らのいら



は容赦ない言葉を吐いた。たとえばデモ隊の人たちが発する言葉のように。私は、疲れてしまつた。5時を過ぎると病院を退散することにした。

スーパーで鶏肉と卵を買つて、家に帰つた。昆布と鰹節で出しをとり、みりんと酒と醤油で汁を作つた。ビールを飲みながら、じつくりと親子丼に取り組んだ。若い頃、生化学の実験を仕事にしていた時期があつたので、「物質が温度の変化と時の経過によりどのような化学変化を遂げるか」という課題に関しても熟練工であつた。

親子丼を作れるようになり、最後の晩餐にしたいと思うようになったのは、そういうわけである。

(愛知淑徳大学教授・名古屋大学名誉教授)